

観音寺開創 1300 年記念として建立 丹波あじさい寺(京都府福知山市)に「法道仙人立像」

彫刻家
長岡和慶



インドで修行を積んだ法道仙人の立像。インドの霊鷲山(現在のネパールのルンデューク)を經由して来日したとされる。現在の兵庫県南西部、山岳などに開山・開基として名を遺す

愛知県岡崎市の石彫家で大仏師の長岡和慶師が制作した「法道仙人立像」が、このほど京都府福知山市の高野山真言宗補陀洛山観音寺(第五十三世・小藪実英住職)に建立された。同寺は関西花の寺二十五カ所霊場の第一番札所「丹波あじさい寺」として知られるが、この仙人像は同寺開創千三百年記念として制作されたもので、本堂北側の境内に建立された。

平成三十年十二月、福知山市の榊中垣石材(中垣隆司社長)から同像建立に関する問い合わせ

せがあり、法道仙人に関する資料をもとに見積書を作成したところ、翌年四月に正式な依頼があった。本体は五尺五寸の立像とし、岡崎産みかげ石でつくることになった。

法道は、インドで修行を積んだ徳の高い仙人で、鉄の宝鉢「鉄鉢」や木の杖、金剛杵(二両端が三つ又に分れた三鈷杵)、煩惱を粉碎する独鈷杵(金剛杵の基本。破壊と堅固の両側面がある)、あるいは仏の智慧が揺るぎないことを表すものなどを持つ。お釈迦様が「無量寿経」や「法華経」などを説いた霊鷲山で暮らしていたが、六、七世紀頃、中国・朝鮮半島を經由して来日したとされる。播磨国(現在の兵庫県南西部)一帯の山岳などに開山・開基として名を遺し、所縁の寺院は兵庫県内だけで百十カ寺以上ともいわれている。

石材は愛知県豊田市産「花沢石」に決定し、採掘元の(株)鈴木利夫社長に発注。新元号に変わった令和元年五月に原石が切り出され、翌月、不要部分を石切りした状態で納品してもらった。その間、別の仕事も進行中で、墨による寸法の割り出しなど、仙人像の制作に取

り掛かったのは八月に入ってからだった。像容は、いかにも仙人らしい、飄ひげを伸ばした瘦せ型の老風貌(老貌)で、頭に長頭巾を被り、縫れた草鞋を履いて岩座の上に立つ。左手に持つ木の杖を別の素材でつくる案もあったが、永続性・耐久性を考えて同じ石でつくることにした。体と杖が離れた部分には雲の彫刻をつくることで見栄えよく補強した。

右手に何を持たせるかは保留中だったが、その部分だけポリウムを残して次の工程へ進んだ(最終的には、小藪住職の意向に基づいて「経巻」や千三百年前の地図、法道仙人所縁の寺院などが記録されている)ことを想定した巻物を持たせた。

目尻に皺があり、一見、穏やかな表情にも見えるが、眼光は鋭く、意志の強さを表す。岩座上の立ち姿としたのは「どのような場所でも仏法は説ける」との思いからだ。

右手の持ち物以外ほぼ完成した時点で、小藪住職から追加で「馬頭剣の馬の頭と、その下の三面からなるシバ神(馬頭観音)を彫ってほしい」との依頼があり、これも送ってもらった写真を



記念撮影の除幕式で、長岡和慶師から和慶師に感謝状も贈られた



参考にしながら、検討の末、木の杖の最上部に彫って仕上げた。後日、その完成写真を郵送すると、住職と中垣社長から謝意とともに喜びの声が伝えられた。

これは後日判明したことが、和慶師と小藪住職は、実は面識があった。平成二十七年九月、和慶師が和歌山県の高野山真言宗総本山金剛峯寺を訪ねたとき、当時の真言宗教学部長で同宗派国際局長としてお会いしたのが現在の小藪住職だった。中垣社長は、そのことを知らないまま「日本で法道仙人像を彫れるのは長岡さんしかない」と思って、和慶師に依頼したので。

この事実を知って和慶師は「仏様が導いてくれたご縁に違いない」と感謝した。

今年一月に無事納像し、四月二十六日に除幕式を行なったが、新型コロナウイルス感染防止に配慮して、住職や総代、感謝状授与者など参列者を減らし規模を縮小して厳修された。

◎長岡和慶

愛知県岡崎市東牧内町字堤外60-1

TEL 0564-32-2335

E-mail: mitte3n11@yahoo.co.jp